

蘇芳集

秋の暮

青山

丈

窓で見て庭へ出て見て月今宵
帰燕のあとの対岸に人が居る
曼珠沙華見た日と見てはゐない日と
通るたび肩先に触れ秋簾
誰も来ないと剥いてゐる衣被
蠟螂のその日はそこに居る日かな
どの角を曲つてもいい秋の暮

蓮の花

富田正吉

仏頭を拝すに扇ひらくかな
汗ばみて敗残兵のごと歩く
鳥塚も包丁塚も灼けるたり
成り行きでここに來てゐる蓮の花
蓮の花十指握つて見てゐたり
見渡せる処に來れば蓮無数
土用太郎ずんずん歩く上野かな

八月十五日

別府

優

今朝秋の椀に浮かせて枸杞の粒
簡単な言伝て秋の百日紅
もてなしの灯の煌煌と盆三日
箸あらふ音たて八月十五日
雑巾の縫目をただす敗戦日
寺よりの便りの届く颯風禍
父母といもうとの声花芙蓉

水呑んで

前田 陶代子

木洩日に歩をつぐ四方六千日
二タ三口水呑んで紅蓮のまへ
かぎりなき日向紅蓮の日向
人ごゑにほぐれて蓮の二三片
炎天を来て草の香の森の口
一水を雲の暗める竹煮草
胸もとに飾りの釦パリー祭

夾竹桃

松原 ふみ子

国男忌や座敷わらしを信じもし
玉音の記憶は遙か夾竹桃
還らざる一人ひとりに敗戦忌
蝉時雨戦は世々に絶えもせず
けさ秋の空へ見送る一番機
船端に肘を委ねて鯨日和
秋麗の練習船は帆を拡げ

草の花

峰岸 よし子

流灯やひそひそと人集まり来
盆過ぎの風のかろさの疊かな
朝よりの喉の渴きや広島忌
モノクロの映画八月十五日
握手して月日を戻すいわし雲
草の花ひと日ひと日をつつがなく
自づから秋の起居となりにけり

秋のこゑ

宮尾 直美

帰省子に星のあふるる空のあり
空蝉の影より淡し父のこと
遙かより波生まれくる青芒
音もなく雲湧き上る広島忌
ぎらぎらとそよそよと秋来てをりぬ
新盆の闇を幽に水の音
ダム湖いま山より覚めて秋のこゑ

水飲み鳥

吉田幸敏

朝顔

川上昌子

ビバークとなる山の日の星の数
物語 五十四帖 秋に入る
野分過ぎ水飲み鳥は水を飲む
秋扇なまへの書いてありにけり
神奈川沖浪裏 秋の簾巻く
天高し先師の墓碑にみんなるて
露草を供花に挿し足す七回忌

秋の暮

小川美知子

冷水の喉とほるとき雲の峰
三つとも違ふパン買ひ秋に入る
八月の葉桜風が吹いてゐる
身を反らし自転車躲す夕化粧
濡れ傘を提げて秋夜のバスにゐる
ツクツクホーシ学校の大きな木
公園にもうひとりゐる秋の暮

ポルトップぶしゆつとあけて夏終る
永遠とおもふ一分原爆忌
湧水のしんと湧きつぐ広島忌
火宅にはあらず凌霄夕日なか
朝顔や相見て猫の拘らず
「あらまあ」と言うて誰やら草の花
八月の鳶湖にこゑ捨つる

吾も窓外も

木内憲子

扇置く草が雨音宿すころ
絡みたる蔓ひとすぢも秋の家
身の裡にくらきところや星まつり
秋はしづかに病棟に出入りびと
手術痕しくしく秋の進むなり
看護師が来る秋蝶のごとひらひら
とんぼうや吾も窓外もしづかなり

朝顔 清水裕子

鐘の音の木木渡りくる秋気かな
朝顔に一杓の水匂ひ立つ
朝顔の巻鬚吹かる寄辺なく
砂利道に貝殻まじる秋の風
廢材の切口湿る昼の虫
諸鳥の沼尻占むる秋彼岸
詫び言を考へをれば萩に雨

髪洗ふ 下平直子

異を唱ふハンカチ強く握りしめ
まちまちの椅子に日当る氷旗
ソーダ水噂話に尾も鱈も
投函の封書ことんと日の盛
晩年の始まつてゐる髪洗ふ
亡き父母の在すあたりの稲光
遠くよりわが名呼ばるる鯛雲

自句自解

朝顔の巻鬚吹かる寄辺なく 清水 裕子

鉢植の朝顔をいただいた。蕾らしいものが二つほど果して咲くだろうかと期待と不安とが入り交ったが、その思いとは裏腹に七月のある朝、鮮やかな紺の大輪が咲いた。目覚めの遅い私は先を越された思いであった。八月に入ると気温も日一日と高まり、高階のベランダに置くのも気掛りになったが、案ずることなく次つぎと咲いた。巻鬚も抛り所を探しているかに揺れ、支柱を立てると朝顔の鉢植としての景が整い清清しさを感じた。毎朝楽しみにした。

見ゆるもの見て炎昼を歩くなり 富田 正吉

今年の暑さはいつまでもしつこいくらいに続いているので脱帽するしかない。運動不足になるし、食欲も減退している。六月、七月、八月、この稿を書いている日もやはり暑い。句を考えるのは書斎派であるが、そうもいつていられない。故に歩くことになるのは仕方ない。外は炎昼であっても何かを見つけないければならない。これがなかなか難しい。見えるものからの選択が余儀なくされるからでもある。見えたものの何に焦点を当てるかが勝負である。